

## 抄 録

## 岡山醫科大學業府第2卷4號

## 1 岡村舜三 實驗的鬱積黃疸の糖利用に就て

余は既に家兎の實驗的鬱積黃疸に就て靜脈内注入による葡萄糖の尿糖減少及び肝臟糖原質の増加機轉の關係を報告せり。近時藤田氏は正常家兎に諸種の糖を経口的に投與し果糖葡萄糖「マンノーゼ」「ガラクトーゼ」の順序に尿糖漸増するを見、尙ほ膽汁酸を同時に與ふる時は同一順序にて尿糖の漸次増加排泄及び漸減的肝臟糖原質の形成せらるるを報ぜり、イザーク氏は肝臟に於ける糖原質形成には先づ葡萄糖は「エノール」型になるを要すと云ふ。果糖の如きは容く同形となる、かくして糖は糖原質に變化すと云ふ、葡萄糖は弱「アルカリ」性溶液中にては果糖になり易き事實あり又伊藤氏は犬に膽汁酸を口經的に投與し肝膽汁のPH及び血液中の豫備「アルカリ」を高める事を發見し尙ほ唐澤、畠山、岡村、河田諸氏は膽汁酸は體內「ヌクレイン」代謝を旺盛にし尿及び膽汁中の磷酸排泄を増加せしむと云ふ。茲に於て家兎の鬱積黃疸に於て各種の糖を投與し尿糖排泄及び肝臟糖

原質を検し相互に之を比較し鬱積黃疸に於ける炭水化合物の新陳代謝の狀を窺知せんとし本實驗を行ひ次の如き成績を得たり。家兎の實驗的鬱積黃疸に於て糖を靜脈内に投與すれば果糖葡萄糖「マンノーゼ」「ガラクトーゼ」の順序に尿糖の漸増的排泄を來し手術後第2日には葡萄糖果糖「マンノーゼ」「ガラクトーゼ」の順序に漸次増加し術後第5日に至りては果糖葡萄糖「マンノーゼ」「ガラクトーゼ」の順序に漸次増加して排泄さる、但し第2日は果糖の場合は正常に比し増加し他は一般に減少す第5日總て減少す。肝臟糖原質は正常家兎にても鬱積黃疸家兎にても果糖葡萄糖「マンノーゼ」「ガラクトーゼ」の順序に漸減的に形成せらる、然し術後第2日には膽汁の逆流により血中の膽汁酸増量するためならんか正常に比し増加し第5日に於ては飢餓のため體内の炭水化合物燃焼旺盛になるため減少す。

## 2 岡村舜三 鬱積性黃疸に於ける糖同化に就て

余は既に家兎の實驗的鬱積黃疸に於ける人工糖尿の正常に比し減少する事及び肝糖原質が其初期には正常に比し増加し長期に亙る時は減少する事を報告せり更に余は之が果して體內膽汁酸の消長と關係を有するものなりやを究め又肝糖原質形成には安定なる葡萄糖が果糖の如く「エノール」型になり易きものに變じ従つて果糖が葡萄糖より容易に糖原質になり又肝疾患には果糖を與ふる時は過血糖程度なれど容易く尿に移行し葡萄糖は之に反すと云ふ Pring

scheim, Isaiie の成績を參考とし兩者の鬱積黃疸に於ける排出状態及び肝糖原質生成を比較し更に長期に亙れる黃疸家兎に糖と共に膽汁酸を注入して肝糖原質量を比較せり。

其成績を總括すれば鬱積黃疸家兎の葡萄糖排出は一般に正常に比し減弱すれども果糖は之に反し一般に増強する傾向あり果糖は葡萄糖より速かに肝糖原質形成に助かり又長期に亙る黃疸に於ては肝糖原質生成は正常以下に降下すれども膽汁を皮下に與ふ

れば葡萄糖果糖共に正常以上に亢進す而も果糖よりの糖原質形成は始めは葡萄糖より良好なれども糖投與後時をふると却て減弱せらる。

之により鬱積黄疽初期の糖原質形成の亢進は膽汁酸の過剰により長期に亘る黄疽の形成減弱は膽汁酸の不足によるものならん。

### 3 桑名省郎 凝集原濃度と凝集反應との關係に就て

著者は凝集原として生理的食鹽水の 10 cc 中に菌量 200 mg より漸次遞減的に稀釋せる菌浮游液を用ひ抗大腸菌及び抗チフス菌家兎免疫血清に對する主副凝集反應並に免疫稀釋細菌沈降反應に於ける結合帶との關係を檢査し次の結論を得たり。

1) 凝集反應には反應發現上最も當然なる抗原濃

度即ち沈降反應に於て緒方博士の認めたる結合帶を有す。

2) 凝集素の結合帶は非動性免疫を行ふも變ずる事なし。

3) 細菌凝集素及び細菌沈降素の結合帶は高低互に平行す。(自抄)

### 4 福武敏重 鼻加多兒の發生が三叉神經幹顔面神經幹の切斷或は上頸神經節の摘出に由つて如何に影響さるや

鼻加多兒の分泌が睡眠時に停止するは周知の事實にして其原因は神經作用の停止によるならんと臆想さるも之に關する實驗的研究は未だ之なかり著者は此問題を徹底的に解決せんと欲し家兎に就きて一側に於て頭蓋内にて三叉神經幹若しくは顔面神經幹を切斷し或は上頸神經節を摘出し次で 30%「フォルマリン」液を兩鼻腔内に吸入器にて 3 分間平等に霧散せしめたり然るときは約 6 時間の後に鼻加多兒の爲め分泌物流出するに至るものなり。茲に於て動物を殺し鼻部を取り醋酸を加へたる オルト 氏液にて固定し脱石灰の後組織的標本を作り檢せり。三叉神經切斷後のものに於ては非術側の鼻腔粘膜は腫脹充血し鼻腔は狹隘となり且分泌物を充填せり之に反し

術側にては粘膜の腫脹著しからず従て鼻腔は廣潤にして兩側の差極めて著明なり顔面神經切斷後「フォルマリン」吸入を行ふときは其結果は三叉神經切斷後と全く同一なりき。1 側上頸神經節を摘出したる後「フォルマリン」を吸入せしむるときは三叉神經切斷の場合に反し鼻粘膜の腫脹は却て術側に於て顯著なるを見たり之を以て見れば交感神經は血管を收縮せしめ炎症の發生を抑制するものなり最後に 1 側に於て三叉神經切斷と上頸神經節摘出とを行ひ「フォルマリン」を吸入せしむるときは炎症の度は他側より少しく輕微なるを見たり之を以て見れば少なくとも鼻粘膜に於ては三叉神經より刺戟の傳達さる副交感神經の血管收縮作用よりも大なるものと信ず。

### 5 藤田靖 膽汁酸の肝臟糖原質形成に及ぼす墨汁及び「トルイレンディアミン」の影響に就て

網狀織内皮細胞系統は臟器の物質新陳代謝に密接なる關係ある事は既に明かなる事實なり。而して此の細胞系統の脂肪、含水炭素、鐵、「カルシウム」新陳代謝に於ける關係は多くの研究者によりて實驗せられたり。而して此の細胞系統は含水炭素新陳代謝

即ち糖原質形成及び分解に密接の關係を有し且墨汁及び「トルイレンディアミン」は其の輸入によりて此の細胞系統を機能的に填塞する事を得るは確實なる事實なり。

1827 年御前氏以來近森、岡村諸氏及び藤田により

て胆汁酸輸入に因り肝臓糖原質形成が著しく促進せらるる事を確認し1927年米村氏は犬にて肝臓の胆汁酸形成は所謂生體染色に於て強く下降し且此の下降は24時間以上繼續せざる事を観察發見したり。此の事實に基き網狀織内皮細胞は胆汁酸形成に或重要なる役を勤むる事を結論するを得。

上述の事實に基き余は肝臓糖原質形成に就き墨汁及び「トルイレンディアミン」の影響を胆汁酸を用ひて觀察し即ち一方に於て墨汁及び「トルイレンディアミン」を以て網狀織内皮細胞組織を填塞して胆汁酸形成下降を來さしめたるものに於て胆汁酸の再輸

入により肝臓糖原質の形成促進を再び證明し得るや否や尙ほ他方に於て胆汁酸輸入により肝臓糖原質形成と網狀織内皮細胞組織の機能との關係を詳明ならしめん爲めに實驗し次の事實を立證したり。

1) 胆汁酸の糖原質形成促進作用は「トルイレンディアミン」少量輸入によりて上昇す。

2) 墨汁及び「トルイレンディアミン」大量輸入は此の促進作用を低下す。これは肝臓に於ける胆汁酸形成の減少による、尙ほ肝臓内網狀織内皮細胞は胆汁酸の糖原質形成促進作用に密接の關係を有す。

## 6 伊丹訓吾, 東三郎 雪花菜中の抗尙健病性作用物質に就て

余等の1人東は、先に、雪花菜の「アルコール」浸出液より「メチルアルコール」に溶解せず「クロロフォルム」に溶解しトルテリー、ヤッフエ氏反應を呈する非結晶性不鹼化物質を得て、之を膽囊瘻を有する犬に經口的に投與し、胆汁並に胆汁酸排泄の増加するを認めたり。尙ほ該物質は紫外線照射により其作用の更に増強せらるるをも實驗し、雪花菜中に

は胆汁酸排泄を促す「エルゴステリン」様の「ステリン」體が含有さるるを報告せり。

依りて余等は更に、該物質の抗尙健病性效果試驗を企て、幼若白鼠を使用し、尙健病起生食餌に添加飼養せるに、紫外線照射を施せる、該物質は1日量10底宛の添加にて尙健病豫防的效果あるを認めたり。

## 7 伊藤挺 血液水素「イオン」濃度に對する胆汁酸の影響に就て

余は前回の實驗に於て、胆汁酸は生體内に於ける水素「イオン」濃度調節に對し、必要なるもの一つなるべしと豫告せり。而して河田、畠山、藤原、關藤諸氏の研究に因り、胆汁酸投與により「ヌクレイン」新陳代謝は旺盛となる事實よりして、Phosphatpufferung 増加の結果肝臓内 Puffercapacität は大となるべきはこれ又思考し得る處なり。かかる際肝臓内 Puffercapacität に變化ありとせば、これにより又血液に何等かの影響を來すべきは想像するに難らざる處にして、即ちこの關係を鮮明にするは甚だ興味ある問題なれば、予はかかる點よりして本研究に従事し血液水素「イオン」濃度及び其酸中和能を檢索し次の結論に到達せり。

1) 犬血液水素「イオン」濃度は「ヒヨール」酸投與により何等影響されども、其「アルカリ」貯藏量は稍々上昇す。

2) 膽囊瘻遺置の犬に於て、胆汁を全く外部に排出せしむる時は、血液水素「イオン」濃度及び「アルカリ」貯藏量は下降す。

3) 血液水素「イオン」濃度及び「アルカリ」貯藏量のかくの如き降下は、「ヒヨール」酸投與により再び原値に復するか或はそれ以上に上昇す。

4) 血液水素「イオン」濃度及び「アルカリ」貯藏量は、實驗的鬱積性黄疸の際には時を追ふて漸次上昇す。

即ち上記のことより胆汁酸損失は生體に Acidosis

を來し、之に反し其過剰は Alkalosis を招來することを知れり。

この事實よりしても、膽汁酸は生體の水素「イオン」濃度調節に重大なる意義の存するを察知すべし。

## 8 松尾義雄 眼温度の研究

眼温度の研究に就ては、數氏の研究業績あれども、何れも計測の條件不完全にして、計測の箇所又不充分なり。予は室温、湿度、氣流、季節及び眼瞼状態(開放及び閉鎖)等を顧慮し、熱電式温度を用ゐて、家兎眼諸位の温度を計測し、次の結論に到達せり。

1) 家兎直腸温は、周囲の氣象條件の影響を受く予の實驗に於ける氣象條件(室温 33.7°C—10.2°C, 湿度 63%—41%, 無風状態)に於ては、直腸温は主として室温の影響を受け、湿度の影響は著明ならず。

2) 眼瞼温は直腸温より低し、兩者の差は室温低き程大にして、湿度の影響は予の實驗條件の下にては著しからず。

3) 眼温度は各部位によりて異なる、其温度分布状態は、眼瞼状態及び外圍の氣象條件の影響を受く。

4) 眼瞼を開放すれば、眼温度低下す、其低下度は室温低き程大にして、湿度の影響は予の實驗條件の下にては著しからず。一般に室温の低き程、又眼諸部位中表面に近きもの程、著明に低下す、結膜窩穹窿部温及び硝子體後極温は眼瞼状態の影響を受けず。

5) 眼温度は常に直腸温より低し、其差違は、表面に近き部位程、又室温の低き程大なり、然るに穹窿部温と直腸温との差違は室温の如何に關せず常に一定なり。

6) 眼諸部位の温度を穹窿部温と比較するに、同温なるか或は低温なるが、室温 30°C にては、硝子體温高し、一般に室温 20°C に於いて、眼諸部位の温度最も平均せり、室温 20°C にて体温調節最も佳良なりとの原則は眼温度調節に關しても、適用せらるべし。

7) 眼球内にては、硝子體後極温最高なり、表面に近く位せる部位程、又室温の低き程低温なり、眼瞼状態は硝子體中央迄影響す。

8) 眼瞼閉鎖状態にては前房内の温度は一様なるが、開放状態にては、前房内の前部の温度は後部の温度より低し。

9) 血管なき水晶體の温調節は不完全なり。

10) 室温高温なる時には、硝子體中に温鬱積し室温低温なる時には、硝子體過冷す、これ硝子體に血乏せ管缺るによる。(自抄)

## 9 佐伯純一 血漿纖維素原及び血清相互關係に就ての血清學的研究(第1回報告)

### 沈降反應及び補體結合反應に就て

血漿、纖維素原の血清學的方面に於ける研究は今日迄盡されたる所尠く其研究業績を見るも屢々説明に苦しむ事實に遭遇し而も良く特異性の數量的に明確なる證明或は反應度に就きての詳細なる報告を得る能はざる状態なり。茲に於て著者は緒方氏抗體稀釋法に依る沈降反應法並に補體結合反應法を用ひて抗體の量的關係より檢索を試み極めて興味ある事實を發見するに至れり。著者は先づ血漿、纖維素原及

び血清が免疫學的に如何なる相互關係にありやを知らんが爲め抗山羊血漿、纖維素原及び血清家兎免疫血清に就きて檢索し、次で各種動物(牛、山羊、豚、馬、犬、鶏)纖維素原免疫血清に對する諸種動物(牛、山羊、緬羊、豚、馬、犬、猫、海狸、人、鶏)纖維素原、血漿及び血清の反應を檢して以て纖維素原の特異性を吟味し次の如き結論を得たり。

1) 血漿は免疫學的に血清及び纖維素原の2種抗

原性を保有す。

2) 故に抗血漿血清は血清に對する抗體と同時に纖維素原に對する抗體をも含有し免疫血清中の兩抗體量を相比較する時は前者は常に後者より多量なり。

3) 1 哺乳動物纖維素原免疫血清は同種動物纖維素原のみならず他の種々なる哺乳動物纖維素原とも良く反應する事を得。

4) 哺乳動物纖維素原免疫血清は鶏纖維素原とは殆ど反應し得ざるも唯抗犬纖維素原血清に於て僅

乍ら陽性反應を呈し、同様の事實は又抗鶏纖維素原免疫血清使用の際にも認めらる。

5) 而して何れの場合に於ても主反應の效果と副反應の效價との間には常に明かなる差異あり。

6) 補體結合反應の結果は沈降反應の場合と殆ど一致し、唯其效價は常に沈降反應の夫れより遙かに低價なり。

7) 茲に於て纖維素原は臟器特異性を有すると同時に又種屬特異性をも兼備する事明確なり。(自抄)

## 岡山醫科大學業府第3卷1號

### 1 佐伯純一 血漿纖維素原及び血清相互關係に就ての血清學的研究(第2回報告)

#### 過敏症反應に就て

患者は曩に沈降反應並に補體結合反應によりて血漿、纖維素原及び血清の相互關係を免疫學的に闡明し且纖維素原の特異性を吟味し臟器並に種屬兩特異性の存在を證明せり。本編に於ては更に進みて稀釋法結合帶を基準として行はるる過敏症反應を應用して上記諸實驗を追試せんとし山羊纖維素原を以て能働免疫せる海猿の山羊血漿及び血清並に諸種動物纖維素原による過敏症反應を検し次の如き結論に到達せり。

1) 山羊纖維素原を以て能働免疫せる海猿は主抗原たる山羊纖維素原は勿論副抗原たる山羊血清並に他種動物纖維素原によりても過敏症反應を惹起す。

2) 抗體と結合し得る最少抗原量の再注射に際し

ては同種動物(山羊)纖維素原により最少量にて過敏症「ショック」死を起すも異種動物(緬羊、牛、犬)纖維素原或は同種動物(山羊)血清にては多量を必要とす。

3) 又一般過敏症症狀の比較によりても諸種動物纖維素原に明かに差異あるを認む。

4) 血漿再注射に際しては其過敏症反應は常に纖維素原の場合と殆ど一致せり。

5) 上記の事實により過敏症反應試験に依ても沈降反應及び補體結合反應に於けるが如く纖維素原に臟器特異性あると同時に又種屬特異性を兼備するものなる事明白なり。(自抄)

### 2 佐伯純一 血漿纖維素原及び血清相互關係に就ての血清學的研究(第3回報告)

#### 沈降素の分離に就て

従來沈降素の分離は至難とせられ其研究報告も實に僅少なりき。然るに近年吾教室の須之内氏は遂に

血清沈降素の分離を遂げ續いて白玖氏は細菌沈降素の分離に成功せり。茲に於て著者は抗牛纖維素原並

に抗牛血漿血清を使用し抗纖維素原沈降素の分離と共に抗血清沈降素の分離をも企てて之に成功し、尙ほ同時に分離沈降素を以て纖維素原の特異性を吟味し次の如き結論に達せり、

1) 抗血漿降素並に抗纖維素原沈降素は何れも血漿或は纖維素原を以て作られたる沈降物より再び分離し得るものなり。

2) 分離抗血漿沈降素は常に2種の沈降素即ち抗血清並に抗纖維素原沈降素を有し而も其沈降量は兩者相匹敵す。

3) 抗纖維素原沈降素の結合率並に分離率は抗血清沈降素の夫等より常に高し。茲に於て纖維素原は

沈降素分離抗原として好適なる事を知る。

4) 纖維素原の種屬特異性は生免疫血清使用の際より分離纖維素原沈降素使用の際に一層著明に區別せらるるものなり。

5) 1纖維素原免疫血清と異種纖維素原とを結合せしめ然る後分離せる非特異性沈降素は主抗原たる同種並に副抗原たる異種纖維素原の何れに對しても何等差異なく反應する事を得。故に抗原の種類に従ひて分離を行ふ時は原免疫血清の特異性をして種屬特異性にも或は又臟器特異性にも導く事を得るものなり。(自抄)

### 3 東三郎 膽汁酸の生成に就て (5)

#### 椎茸と膽汁酸排泄

余が前回犬に「エルゴステリン」及び其紫外線照射物質を食物に混じり與ふる時は膽汁中の膽汁酸が著しく増量する事を認め「エルゴステリン」及び其紫外線照射物質は膽汁酸排泄を増加する事を證明せり。更に其後雪花菜の「アルコール」浸出液より「メチールアルコール」に不溶性にして、トルテリー、ヤツフエ氏反應を呈する非結晶性物質を得て、之等犬に與ふる時は膽汁中の膽汁量を増量せしめ、紫外線を照射する時は其作用の強めらるる事を認め雪花菜の不鹼化物質中には「エルゴステリン」に屬する膽汁酸排泄を増加する物質の存する事を證明せり。すでに鷺見氏は椎茸より「エルゴステリン」を検出せるに依

り、余は椎茸も又膽汁酸排泄を促進するならんと考へ、粉末になしたる椎茸並に乾燥せる椎茸2匁の「アルコール」浸出液より、不鹼化物質及び其精製「エルゴステリン」を得て膽汁酸を有する犬に食物に混じり口的に投與して之が膽汁中の膽汁酸量に及ぼす影響を検したるに共に膽汁中の膽汁酸量を増加し紫外線を照射する事に依り更に増量する事を認めたり。

以上の事實に依り椎茸中にも又膽汁酸排泄を促進する物質の存する事を證明し「エルゴステリン」及び其誘導體が膽汁酸生成に關與するものならんと思惟す。

### 4 武野一雄 麻痺性痴呆腦脊髄液に関する知見補遺

著者は腦脊髄液の病的變化は如何なる機轉に由つて構成せらるるやの疑問を解決する目的を以て麻痺性痴呆腦脊髄液中の含窒素物に對し嚴密なる定量分析を行ひ、次の如き結論に到達せり。

1) 麻痺性痴呆腦脊髄液には Albumin 及び Globulin 量相共に増加す。其内 Globulin は Albumin よ

りも一層甚だし、其原因の一部は少なくとも血液腦脊髄液境界膜の透過性の變化に基く。

2) 麻痺性痴呆腦脊髄液中に在る Globulin 及び Albumin は窒素量の上に於て血液中の夫等と相異なる構成を有す、

3) 麻痺性痴呆腦脊髄液は正常よりも高き殘窒素

量を示し、大部分は Diamino 酸窒素によつて占められ、Purinbasen の窒素は 13.15% なり。この残窒素量の増加は少くとも其一部は中樞神経系統の分解機轉亢進に歸せらるべきものなり。

### 5 大熊泰治、難波良隣 「マラリア」療法を経たる麻痺性癡呆脳髓の病理解剖學的研究

定型的な遲鈍型麻痺性癡呆に「マラリア」療法を施行し、療法後血液脊髄液のワ氏反應は陰性となり、臨牀的症狀も多少の停頓を示し、療法後 5 年で死亡した 1 例の病理解剖學的研究である。

其病理解剖學的所見の中著者等は次の 2 つの變化を重要なものとして擧げてゐる。

第 1 は定型的な麻痺性病變が消滅して一種特有な實質變性を示せること。

第 2 は「マラリア」療法を経たる麻痺性癡呆脳に未だ記載せられた事のない獨特の血管の變化で、所謂慢性血管微毒と動脈硬化のあらゆる移行型を含む變化。

尙ほ著者等は注意深く行はれた「スピロヘータ」檢索の陰性に終れる點に重きをおき、「マラリア」療法による「スピロヘータ」の死滅が本例の麻痺性癡呆病變の消滅の根據をなせる事を主張し、其後に残れる特有の實質變性機轉並に特有なる血管の變化を、「マラリア」療法によつて生ぜる一種の毒素の作用に歸

してゐる。

而して著者等は以上の様な血管の變化を以て Granulombildung, プラズマ細胞の實質内游走等の諸現象と同様な意義を有するものとなし、之等の變化は要するに著者等の所謂 Toxin に対して腦が十分な抵抗を持ち得なかにた事を意味し、療法の際の一つの不良な合併症であると主張し、以上の現象を目して直ちに「麻痺性癡呆なる悪性微毒が腦微毒なる良性の形に變つたものである」となすストロイスラー一派の見解に反對してゐる。

要するに「マラリア」療法によつて麻痺性癡呆が治り得る病理解剖學的根據は、「スピロヘータ」の死滅する事によつて麻痺性癡呆脳髓が「スピロヘートゼ」から觸放せらるる點にあり、然し療法に際して生じた毒素に対して抵抗が不十分な場合には縱令「スピロヘータ」は死滅しても、本例に見られた様な血管の變化及び其他の病變を遺存する事があり、以て療法の効果を左右する。

### 6 宮本種美 迷路内淋巴液の由來に就て

著者厥きに藥劑中毒に因る聽器障礙の病理を實驗的に攻究せし際「アトキシール」中毒に因りて聽覺障礙を來たせる海猿の内 7 頭に於て其迷路内に迷路内淋巴液の由來に就て有力なる處見を認めたり。

即ち其 7 頭は聽反射消失後 2 日乃至 4 箇月後生體固定を施して聽器を檢索せしものなるが其總てに於て聽神經の組織の變化の他に脈絡帶組織の破壊及び Reissner 氏膜の下垂を認めたるものにして此 Reissner 氏膜の下垂現象は脈絡帶の變化著しきもの程著明にして、甚しきものは聽反射消失後 2 日の標本

に於て既に Reissner 氏膜の沈降せるを見たり。前庭囊及び半規管には異常を認めざりき。尙ほ他の脈絡帶に變化無き動物に於ては、例へ神經組織に於ける變化如何に高度なりとも Reissner 氏膜に異常を認めざりき。此事實を著者は Reissner 氏膜の沈降は脈絡帶の破壊に因る内淋巴分泌の障害に因る内淋巴液消失に因るものとなし、尙ほ Wittmaack 及び Schambough 等の内淋巴分泌に關する見解を批判して、之等 7 頭の内僅かに 1 頭に於て内外螺旋溝上皮の萎縮せる他螺旋唇及び内外螺旋溝上皮に異常無き點より

して、蝸牛部に於ける内淋巴は主として脈絡帯より分泌せらるるものならんと推定せり。尙ほ此際著者は前庭膜様部に變化の及ばざりし點よりして Hensen 氏連合管が蝸牛及び前庭部の内淋巴液の交通を許すやに關して疑問を挿みたり。

斯くして著者は

1) 脈絡帯損傷さる時は Reissner 氏膜の沈降を來たす、而して其損傷甚しき程沈降著し。

2) 内淋巴液は蝸牛管に於ては主として脈絡帯より分泌せらるるものの如し。

と結論せり

## 7 吉田豊太 家鴨心臟原基の融合に就て

1 節乃至 18 節の原節を有する家鴨胎兒の心臟原基殊に其内膜の融合状態に就きて、連續切片及び複成模型の作製に依り次の如き成績を得たり。

1) 血球の生成は既に第 1 原節の形成せらるる以前にして、心臟内へ初めて現はるる時期は遙かに遅くして、13—14 原節の胎兒なり。

2) 心嚢腔は 2 節の原節を有する胎兒に於て初めて中胚葉内に多數の小腔として現はれ、漸次融合して左右各々 1 節の内腔を形成す。

3) 血管細胞は中胚葉より作られ、其最初に現はるる時期は 3 節の原節を有する胎兒にして、このものは元來有對に發生するものなれども、頭方に於ては左右兩原基は既に早く中央線上に於て吻合をなす。

3) 心臟筋層は中胚葉側板の肥厚せるものより生じ、其左右兩原基は 7—8 原節を有する胎兒に於て其中央部より融合し初め、12 原節を有するものに於て其融合を完成す。

5) 前心膜間は 6—7 原節を有する胎兒に於て初めて現はれ、8—9 原節を有するものに於て中央部より破壊し初むるも、心球の部に於ては後長く存し、12 原節のものに於ても尙ほ其殘存するを見たり。後

心間膜は 9—10 原節を有する胎兒に於て初めて形成せられ、15—18 原節のものに於て其中央部より破壊し初む。

6) 心臟内膜は既に述べたる血管細胞より作られ、5—6 原節を有する胎兒に於て初めて内皮細胞の性質を持ち、8 原節のものに於て左右 2 節の細長き管となる。この兩原基は心球及び心室の部に於て最初に融合し、心球の部に於ては右側原基は左側はそれに比し著しく強大にして、後者の消失後は獨り心球の形に與るものの如し、これに反して心室の上部に於ては左側のもは却つて右側のそれよりも強大なり、13—14 原節を有する胎兒に於てこの左右原基の融合は略ぼ完成せらる。

## 8 伊東一生 過敏症抑制作用に關する實驗的研究(第 1 回報告)

### 過敏症と迷走神經切斷

過敏症豫防或は其抑制作用等に關する研究にあたりては、試獸個々に就て必發的に過敏症を發せしめ得ると云ふ條件の存すること最重要なり。從來の此の種の實驗にありては、此の點に於て不備なりしものと云ふべく、吾が教室に於て多年研究せる抗體稀釋沈降反應測定法はこれに對して確實なる根據を與

へたるものと云ふ可し。文獻を按ずるに迷走神經が過敏症に及ぼす影響に就ての研究は少く、而も其成績の一致せざりしは實に上述の理由による所大なるものあらんと思惟するものなり。余は吾々の方法により此の問題に關する研究に従事して大略次の如き結果を得たり。

1) 能動性或は被動性に感作せられたる海狸に於て迷走神経切斷は抗原再注射による過敏症を抑制し兩側切斷は1側切斷よりも其作用強し。

2) 迷走神経切斷後の血清は切斷前の夫れに比して恐らく其膠質状態の變化を來すものならん。これは試験管内に於ける沈降反應實驗に於て迷走神経切斷後の血清が切斷前の夫れに比して其反應を阻止的に作用することによりて證明し能ふ。

3) 海狸の過敏性 Schock 死の際に於ける肺膨張

は兩側迷走神経を切斷するも過敏性 Schock 死を抑制し能はざる量の再注射を行ふ時にあたりても、其死後にこれを見ることを得。即ち肺膨張は生体内に於ける抗原抗体結合によりて惹起せらるる二次的現象なり。

4) 迷走神経切斷によりて過敏症を抑制すると云ふことに對しては、血清の膠質状態の變化と云ふことが重要な役目を演ずるものならん。(自抄)

### 9 陶守三思郎 輸卵管葡萄状鬼胎の1例

著者は問診並に他覺的所見により輸卵管流産と診斷せし36歳の經産婦に開腹手術を施行せしに意外にも輸卵管に發生せし葡萄状鬼胎なりして其手術記事並に剔出標本の所見等に就て詳細に報告せり。尙本例は實に甚だ稀有にして外國に於ては Croom,

Wenzel 氏等の各2例 Otto, Reeklinghausen, Matwejew 及ビ Sykow, Henkel, Weishaupt, Mathias 氏等の各1例、本邦に於ては僅に今淵氏の1例の報告あるを見るのみなりと。

### 10 福田豊, 須藤吾之助 間脳の構造並に生理(第1回報告)

#### 卵核及び副卵核並に腦室周圍核に就て

間脳の諸機能を闡明ならしむる第一歩として實驗動物(特に家兎)の解剖的檢索を企て、其一部を發表せり。

1) Nuclens oralis et paravalis(卵核及び副卵)

核家兎間腦中、第3腦室より稍々隔離して存在する一雙の細胞群は其の形態並に個々の細胞の構造等しく類似せる點等より周圍就中背側部の細胞より分ち之を假に Nucl. ovalis と呼べり。尙ほ此核の外縁に沿ひて存する細胞帯は細胞學的構造、全然前者と同一なるを以て Nucl. paravalis と命名せんとす。之等の核は灰白隆起部中最も著明なるものに拘らず、詳細に記述せし文獻を缺くは異とすべく、僅かに堀見氏は氏の B 細胞群の一集團に屬すべき pars ventromedialis なりと觀察せるのみ依て其全貌を詳述し假りに上記の命稱を與ふ事とせり。

2) Nucl. periventricularis(腦室周圍核)

此名は Lewy が家兎乳嘴體の前部に存在する多角形の細胞よりなる核に附したる名なり。其動機は一新核なりとの見解に基き爾來他の學者により Nucl. paraventricularis と誤らること多し。

余等の檢査よりみれば氏の命名は全然無意義にして、要するに乳嘴體中 Nucl. medialis の pars anterodorsalis に過ぎず。

而して斯る錯誤の原因は、此附近に存する Vieq d'Azyl 氏東, Forniasäule, 乃至 Nucl. medialis の pars post-ventralis 等の走行、發育の變化に伴ひて起りたる、各斷面上の形態的變化に基因すべし。

尙ほ Nucl. supramamillaris も亦此核の一部に過ぎず、之等諸點に關し Kölliker の圖示は寧ろ正當なり。

### 11 伊東一生 實驗的過敏症に於ける抗原再注射量に就て

抗原再注射方法に關して從來幾多の方法擧げられたれども、就中靜脈内注射は最良の方法なり。然れども再注射に要する抗原量の決定方法に至りては遺憾ながら確實なる方法なし。吾が教室に於て多年研究したる沈降反應に於ける抗體稀釋法を之に利用する時には、各試獸個々に就て毎常其の適當量を計算

的に決定し得るものなり。著者は先づ抗體稀釋法實施、同法による適當抗原再注射量決定方法等を述べ、次に能働性或は被働性に感作せられたる海獺に於て諸種の實驗を行ひ、被働感作海獺に於て甚だ少量の抗原再注射量を靜脈内に注射して確實に過敏症を發せしめ得たることを記載したり、(自抄)

### 12 藤田靖 「アミノ」酸より肝臟糖原質生成に及ぼす膽汁酸の影響

蛋白成分たる「アミノ」酸より糖原質が生成せらるる事は一般に認めらるる處なり。依て余は糖より糖原質合成を促進する作用ある膽汁酸が「アミノ」酸より糖原質合成を促進するや否やを検せんと欲して此の實驗を企て、飢餓家兎に膽汁酸のみを與へ又は之と種々なる「アミノ」酸を與へて肝臟糖原質量を検査したるに「ヒヨール」酸のみにて肝臟糖原質著しく増加するによりて糖以外の物質より糖原質の生成せらるる事を知る。

「アミノ」酸はd「アラニン」l「ロイチン」「グリコル」より糖原質合成せられ而かも前2者よりの生成は「ヒヨール」酸によりて促進せらるれども「グリコル」よりの合成は却つて抑制せらる。是れ「ヒヨール」酸が「グリコル」と結合するため糖原質生成母體減少に基因すと考へたり。即ち膽汁酸は蛋白成分より糖原質合成をも促進するものなる事を確認せり。